

朝倉文夫の彫刻表現についての一考察

緒方信行（崇城大学大学院）

朝倉文夫(1883-1964)は、現在の大分県大野城市に生まれた。恵まれた幼少年期を過ごしたが、中学校を退学することとなり、兄の彫刻家渡辺長男を頼りに上京する。東京美術学校彫刻選科に入学した彼は、早くから写実的資質を見せ始め、1907年の卒業制作《進化》は、ラグーザの来日以降から続く日本における西洋的写実表現を代表する作品として有名であり、卒業後も文展で連続入賞を果たすなど活躍する。1910年の《墓守》は朝倉の制作におけるターニングポイントと言われ、それ以降、朝倉は「自然主義的写実主義」を掲げて、一貫して対象を素直に捉えた表現を行う。また彼は、朝倉彫塑塾を主宰して後進を育成するとともに、文展の審査員や東京美術学校教授にも就任し、さらには1948年に文化勲章を受章するなど、日本の近代彫刻界に確固たる地位を築いた。

しかし、このような経歴を持ちながら、朝倉は、現在、日本の近代彫刻史において大きく扱われているとは言い難い。朝倉の活躍期には、荻原守衛や高村光太郎がおり、続いて抽象表現も登場することとなり、彫刻史全体の流れから見れば、朝倉の存在は大きくクロージアアップされてはいないのである。例えば平成19年に開催された「日本彫刻の近代」展（宮城県美術館他）での展示数も、荻原が3点、高村が10点であるのに対して朝倉の作品は1点のみであり、当展覧会のカタログでもある『日本彫刻の近代』における朝倉の紹介も僅かであった。彫刻界だけでなく、社会全体が大きな時代の変革期に突入していたこともあり、その芸術が「アカデミズム」と評される朝倉は、日本近代彫刻史を代表する作家とはみなされていないのかもしれない。だが、古代ギリシア・ローマ時代に一つの完成を見た彫刻の写実表現は、時にはアカデミックな単なる形態把握にすぎないとして批判されたりしながらも脈々と受け継がれ、今日も写実による芸術的価値を追究する彫刻家は絶えることがない。芸術を志す者が単なる「形」の把握のレベルに満足するはずはないのである、と発表者は考える。朝倉文夫も、歴史的変革期の日本の近代において「自然主義的写実主義」を標榜しながら、写実を探求し具現化しようとした一人の彫刻家である。

そこで本発表では、主に東京の「朝倉彫塑館」や大分の「朝倉文夫記念館」、並びに彼に関する展覧会等で作品をできる限り実見調査しながら、朝倉の彫刻における表現の特徴を把握し、それを日本の近代彫刻の流れと比較することで、彼の彫刻表現における挑戦とその展開を明らかにしたい。また、《墓守》や1952年の《平和来》などの顕著な作例を挙げ、それらの制作に際して彼が参考にしたと思われる作品の彫刻表現を文献によっても裏付けながら探ることで、彼が目指した「自然主義的写実主義」がどのようなものであったのかを考察し、朝倉文夫の彫刻の真髄に迫って行きたい。